

UBUD

極楽通信



Bali Bali

Selamat Siang

Ubelo
UBUD

ANKER
BANKA
BANKA

Terima kasih

Jalan Jalan

MAYAMI
FUJIHARA

Vol. 20



photo:Y. Hori

写真はUBUDで発見したレストランの看板で、ご存知テガルカフェのものである。

何がおもしろいかは写真をよく見てほしい。(読み取れるであろうか?) ご丁寧に日本語対応のメニューとなっているのだが、どうもどこかで日本語に翻訳してもらった手書きのコピーか何かを書き写した(想像)ようなのである。その結果、超怪しげなものとなっている。

何とか意味は解読できるので役には立っているわけだが、こういった光景はよく二流のアメリカ映画のシーンなどでも見ることがある。日本語は難しい言語であろうが、こういったものを日本人が目にしてしまうと「とほほ」といった情けない感慨にふけてしまいがちながらも、結構おもしろがってしまうのは私だけであろうか?

バリ語も非常に複雑な形状をしている。ちなみにこのページの下方に表記してあるバリ語は丁寧な始めの挨拶で「オーム・スアステイ・アストゥ」と発音する。秘かに間違いのないことを祈っている。

堀 祐一

Contents

- Kabar Baru Berita Lama
 - 編集長からのご挨拶 4
 - UBUD の SENGGOL を復活せよ！ 5
 - Kul-Kul (クルクル) 6
 - 妖怪ガマン 7
- JEGOG -2-
 - 大地のうねり響く・竹筒楽器 ジェゴグ 8
- Perawatan Anak [2]
 - 正しい出産と育児 in BALI -2- 10
- C・O・L・U・M・N
 - バリ恋愛症候群について - その1 13
- Enak・Enak・Ubud/11
 - トゥアック (Tuak) 14
- Cinta Pohon BINGIN -2-
 - 愛しのバンヤン樹 -2- 16
- Belajar Tari & Gamelan -13-
 - 私と踊りとガムランと / 13 20
- Dari Jepang
 - タリ ジャパン 21
- TOKO BEST 店
 - Kirta Kaloka 22
- Warung 味な店
 - Kafe Padi 22
- 留学生日記 / 2
 - 引っ越し 23



- Berita Terbaru
 - その他のニュース 24
- Orang-orang Ubud/20
 - うぶんな人々 / 20 25
- Pengumuman
 - でんごんぼん 26

○表紙のことは○

ホリエのラジカは、
友彦、芸術音楽、食ハコと.....
shopping. 楽しいにこの地球で。
極楽を味わう。Happy place!
ハコ

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

- Macintosh format の FD (Text Data)
- Dos format (2DD-720KB) の FD (Text Data)
- E-Mail :
- MHC03202: 菅原 (NiftyServe)
- GCB01162: 堀 (NiftyServe)
- hori@potomak.com (Internet)
- eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

編集長からのご挨拶

「極楽通信・UBUD」をご愛読下さってありがとうございます。

UBUD 熱愛症候群のためにと始まったこの雑誌も早いもので4年目を迎えました。当初の計画では二ヵ月に一回、偶数月に出版の予定でしたが、元来のなまけ者がバリののんびりムードに慣れてしまい遅れがちなることをここでお詫びいたします。な～んて、みんなの大好きなバリのせいにして、少々怒りを押さえていただくことにしましょう。読者のみなさんがバリののんびりムードを理解してくれているのと、たいへん辛抱強い方々で助かっています。

さて、UBUD は年々、たくさんの旅行者が訪れるようになり、長期滞在者も増えています。絶対数が増えた分だけ、訪れる人々の旅の目的もさまざまになってきました。日本を逃避した人、恋愛で来る人、ビジネスをしに来る人、物価が安いから来る人、のんびりできるから来る人、ガムランを習う人、踊りを習う人、絵画を習う人、これらが複合したもの等など多様です。そして目的が違う分だけ、バリに対する考え方も十人十色でしょう。訪れる人それぞれに目的や考え方が違うのは当たり前のことですね。

バリにはひと昔前の日本が残っています。そんな空気がわれわれ日本人に馴染み深く、そしてバリ人の気さくで人なつっこく、優しい人柄などが、異国にいる感覚を鈍らせ、滞在しやすくしている大きな理由でしょう。せっかくバリに来ているのに、この地に日本と同じものを求める旅人も多くなりました。文明の導入によって、便利になることや快適な生活ができることにこしたことはありません。しかし、必要以上の、不必要と思えるような文明はできれば控えてもらいたいの

です。「極通」の読者の方々は、このことを十分理解してくれていると思います。

バリの人々がテレビや車、エアコンなどの『文明』を欲しがるとは当然で仕方がないこ

とです。しかし、私たち旅行者にとって、その『文明』が時々疑問に思えることもあります。“こんなところまで来てそれを望むか？”と言いたくなるようなもの。たとえばエアコン。

UBUD は十分に涼しいところ

です。エアコンなどなくても大丈夫のはず。しかし、ある宿ではエアコン付き。自然のままがよいことは誰でもわかっていること、これは旅行者が求めるから設置されるのであって、求めなければ設置されないと思います。泊まる人の勝手でしょと言われれば、確かにその通りです。しかしそれは、ゴミを人の見えないところならへいちゃらで捨ててしまうことと同じことであるような気がします。自分の部屋は確かに涼しくなるでしょう。しかし、その部屋の裏では暖かい空気が吐き出されているのに気がつかない人はよほど無神経です。あえてここで言いませんが、それがUBUD、そしてバリの空気どんな影響を及ぼすかも、普通の日本人なら理解できることです。

「昔のバリはよかった」と言う声をよく聞きます。私たちが昔のバリを見てみたいし、今もそれが変わらず残っていれば嬉しいです。でもUBUDが、バリが昔のまま残ることを望んでもそれは無理なのですね。だから、今のままでいいから、少しでも『文明』を取り入れるのを遅らせて欲しいと願うのは私ひとりだけでしょうか。昔のよいところを取り戻す方向には協力し、余分な発展は出来るだけ遅らせるという考えが、UBUD に対する私の変わらぬ「愛」だと思っています。これからもみなさんが「極通」を読んだ時に感じると思いますが、この「極通」はそんなポリシーで、愛をこめて作っていかうと思っています。「ガンコ親父がまた何かへんなこと書いてるぞ」と笑ってくださっても結構です。

読者のみなさん、これからも永いお付き合い、どうぞよろしく願いいたします。



Illust:Fumio

UBUD の SENGGOL を復活せよ！

SENGGOL (セゴール) に行ったことがありますか？

UBUD しか知らない人は、行ったことがないかもしれません。インドネシア語で Pasar Malam、バリでは SENGGOL (セゴール) と呼んで庶民に親しまれています。ビニール・シートの屋根を簡単な骨組みだけで支えた、質素な小屋が立ち並ぶ屋台街のことです。近くのギアニャールにあるセゴールは大規模で、50 件ほどのさまざまな屋台が売店して賑やかです。バリの若者のデート・コースにもなっています。小規模ですがスカワティやそのほかの村にもセゴールはあります。UBUD にも、1993 年 11 月 22 日に惜しくも閉鎖されてしまいましたが、1989 から 4 年間、15 件ほど軒を並べて、楽しいセゴールが開かれていました。今ではそこは総工費約 6 億 5 千万ルピアをかけた立派な二階建ての Pasar UMUM = 公設市場に変わってしまいました。ギアニャール県の行政により、公設市場を UBUD とギアニャール、そしてスカワティに開設することになり、UBUD は今までセゴールのあった場所が選ばれたわけです。

さて、「極通」スタッフが経験した、懐かしの UBUD のセゴールの様子を少し回想してみましょう。

毎日、夕方 4 時頃になると、朝市が開かれていた広場にぞくぞくと屋台が並びはじめます。広場の片隅に無造作に置かれていた鉄の棒やビニール・シート、木のイスなどを、ちょいちょいと簡単に組み立てて、調理のためのコンロの上にひとつ、客席の真ん中にひとつ、ケロシン・ランプを吊り下げて、準備完了。長いテーブルの真ん中には、もちろん冷えていないグリーン・サンドやココ・コーラのボトルがズラッと並んでいます。テーブルに掛けられたビニール・クロスは、いったいいつ拭いたのかわからないくらい汚れていたりします。そして、長いテーブルにそって両脇にこれも長い木のイスが置かれていますが、これがク

セモノ。ただでさえガタガタ、グラグラするので気をつけていないといけません、特に端に座る時は要注意。反対側に座る人の行動に気を配っていないと、シーソー状態で下の泥沼に墜落、ということにもなりかねません。そう、その頃のセゴールは下が舗装されていないので、雨が降っては泥沼になっていたのです。一度ぬかるみの中に足を踏み入ると、ゴムズウリをもっていかれてしまい、これがなかなか泥沼から取り出せないのです。

そして、馴染みの屋台に、馴染みの客ぶって座ると、いつものバリニーズのお兄ちゃんが、メニューを持ってきます。外国人観光客の多いこの UBUD のセゴールに出ている屋台は、ちゃんと英語のメニューを作っていたところが多く、インドネシア語がわからない観光客にとって大助かりでした。それでもフライド・ポテトとライスという組合せを注文してしまう人もいたりして、そんなアホなオーダーをした隣の観光客に笑いかけて、それがきっかけで仲良くなったりしてしまうのもセゴールの楽しい一面でした。

そう、セゴールは我々観光客にとって、単に胃を満たすだけでなく、観光客同志の絶好の情報交換の場であり、現地のバリ人たちと気さくで楽しい会話ができる社交場みたいなところでした。それでいて、価格はすべてローカル・プライス。筆者が記憶しているところでは、当時、白いご飯一皿が 300 ルピア、サユール・ヒジョウ (青菜炒め) やフーヨンハイ (卵焼きのあんかけ) やチャブチャイ (野菜炒め) が 1,000 ルピアという、今の UBUD の物価高からは想像もできないような安さでした。その他、魚の唐揚げの屋台、バビ・グリン (豚の丸焼き)、サテ・カンビン (山羊の串焼き)、雑貨やお菓子とともにコピやアラック (ヤシの蒸留酒) を出す屋台、安いシャツやサルンを売る屋台、ジャム (インドネシアの漢方) を売るスタンドなどが、渾然一体となってケロシン・ランプの「シューシュー」という音とともに、毎晩夜更けまで賑わっていたのです。

シンガポールやタイや他のアジアの国々にある屋台街もそうですが、これこそ、この土地の生活や文化や人々を知り、感じる事ができる素晴らしい場所なのです。

UBUD に、このセゴールがなくなった今、我々観光客は UBUD に来て、どんなところに行けば UBUD を感じる事ができるのでしょうか。美術館？ レストラン？ お土産屋？ それとも毎夜のバリ・ダンス？

心から、UBUD のセゴールの復活を願っています。



Kul-Kul (クルクル)



写真1

宿にいて、遠くからトントントンと木を叩く単調な音を聞いたことはありませんか？。これは、ブラ（寺院）の儀式の始まりを告げたり、バンジャール（いちばん小さな村組織）などでゴトンロヨン

（相互扶助）の連絡のために使われている通信なのです。

この通信に使われている道具をクルクルと呼びます。クルクルは、内部が洞（うろ）になった円筒形や四角柱の木で中ほどに縦長に切りこみがあり、これを、やはり木の棒で叩きます。太鼓でも半鐘でもない洞木です。これを叩くことによって出る音が、通信手段として使われているのです。クルクルは今でも実用されていて、よく耳にすることができます。

クルクルは、バリの伝統的な慣習に従って準備が整えられたのち作られます。まず、木材は強い霊力のある木が選ばれます。ジャティの木から作られることもあります。おもにナンカの木で、それも芯の部分が使われます。いくつかの儀式が取り行なわれたあと「Undagi」と呼ばれる、職人によって作られます。そして、完成したクルクルは、プサキにある Pr.Ulun Kukul（ウルン・クルクル寺院）の Tirta（聖水）によって清められたのちに、ようやく実際に使われることとなります。

クルクルは日除け、雨避けのための屋根のある高い塔の上にあり、この塔のことを Bale Kukul と呼びます。Bale Kukul は、立派な建築物（写真1）だったり、こんなところで昼寝をしたら、きっと気持ちがよいだろうと思われる木の上の小屋（写真2）だったりします。ブラの Bale Kukul には、たいてい Lanang（男性）と Wadon（女性）のふたつのクルクルがあります。その他はひとつのクルクルで Lanang と Wadon の音を使い分けます。それぞれの場所のクルクルに、それぞれの役割があり、伝達内容によって叩かれるリズムが違い、村人はリズムの違いを聞き分けて、それぞれの役割につきまします。叩き手のことは Kesinoman と呼びます。

クルクルはプリ（王宮）、ブラ、バンジャール、田圃、バンジャールに所属するスカ・ゴン（ガムラン・グループ）などの集合体にそれぞれ備えられています。ブラ以外で、ひとつの Bale Kukul にふたつ以上のクルクルがある場合、これはバンジャールやスカ・ゴンなどが共同で場所を使っているのです。

クルクルの役割は、プリで叩かれる時はおもに、プリで行なわれる結婚式や葬式などで村人に集合をかける時に叩きます。

ブラでは、オダラン（寺院祭礼）の始まりや終わり、そして、準備のためのゴトンロヨンの集合を告げます。

バンジャールではおもに、ゴトンロヨンの時に叩きます。例えば、村の行事の集合や火事や泥棒が出た時などです。

ちなみにバンジャールで叩かれるクルクルの音で、何を意味するのかいくつか例をあげてみます。これはバンジャールを警備をする人の詰め所である Pos Kamlin と呼ばれる建物に掲示してあるものです。

（○印は叩く、／印は休止）

- 1) 殺人
【○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○】
- 2) 泥棒
【○○/○○/○○/○○/○○/○○/】
- 3) 火事
【○○○/○○○/○○○/○○○/○○○/】
- 4) 洪水、地震、嵐、噴火などの自然災害
【○○○/○/○○○/○/○○○/○/】
- 5) 事故
【○/○○○/○/○○○/○/○○○/】
- 6) 警備
【○/○/○//○/○/○//○/○/○//】
- 7) けんか
【○○/○○○//○○/○○○//○○/○○○//】
- 8) 騒ぎが治まり平穏がもどった
【○/○/○/○/○/○/○/○/○/】

警報の時クルクルは、早く打ち鳴らされます。今度から、耳を澄ましてクルクルを音の聞いてみてください。今、この村で何が起きているか理解できる、かもしれません。



写真2

妖怪ガマン

屈強そうな大学生の日本人男性が、私の部屋に血相を変えて飛び込んで来た。

彼は「僕は別に怖くはないのですが」と前置きして話し出した。なんでもホームステイしている彼の部屋で、毎晩（三日間）ベッドに入り電気を消すと、天井裏を何かが歩く、ミシミシという音が聞こえてくるとのこと。ネズミやねこの類ではなく、人間の足音に違いないと言う。時には、机が持ち上げられては落ちる、ゴトンという音がする。屈強な大学生は、決して怖くはないのですがと言いながら、この正体を知りたがった。

同席していたバリ人が、我々の話を聞いて「それは、ガマンが君を誘いにきたんだよ」と興奮気味に言う。大学生は「それは、ガマンしなくてはいけない」と言われたと思った。それにしてもバリ人は興奮気味。「そのホームステイは、いったいどこだ？」と聞かれ、「パサールの裏の…」と言いかけると、バリ人は思いあたるような顔になり、「○○○○か？」とホームステイの名前を言いあてた。「どうして知っているの？」と聞くと、「そのホームステイは昔からガマンが出るという噂がある」と言う。なんでも、昔、家を建てる時に大きな樹を切ったのだが、お祓いの儀式をしなかったようで、その時の木の霊がまだ迷っているのだろうと言う。大学生は少し怖くなってきたようで、その妖怪ガマンとは、一体どんなのかますます知りたがった。

妖怪ガマンは女性で、男性を誘う。子供が神隠しに遭ったように突然いなくなることもある。家族や警察がどんなに探しても見つからない。ある日、深い谷底で、いなくなった子供がマンディしているところを友達が見つけ声をかけると、その瞬間、子供は消えてしまったそうだ。まったく知らない村で見かけたという話も聞く。よくある話だそうだ。「今夜寝る時、裸になって全身に赤タマネギをぬりつけなさい。そうすれば、妖怪ガマンはあなたの身体が見えずどこかへ行ってしまおうでしょう。しかし、どちらにしてもホームステイの主人に頼んで、お祓いをしてもらったほうがいい」とそのバリ人は言う。

そして、そのバリ人が自分自身が体験した話をしてくれた。

ある晩、彼は田んぼに引く水の番をするため、田んぼの真ん中にポツンと建っている小屋にいた。もちろ

ん電気もなく、ランプもともさず、星のまたたくかすかな明かりだけ。まわりは真っ暗闇である。

深夜12時過ぎ、誰かが小屋の前を通り過ぎた気がした。こんな夜中にこんな所を歩いている人はいないだろう、きっと気のせいだと無視した。今度は明かりが見えてきた。明かりはどんどん小屋に近づいてくる。少し怖くなって手元に置いてある懐中電灯で照らしてみると、それは、田うなぎ取りの若者であった。その明かりが遠く見えなくなってしばらくすると、誰かが「おーいおーいおーい」と呼んでいる。誰かがまた前を通り過ぎた気配がした。気配の方に懐中電灯を照らそうとするが、さっきついたはずの懐中電灯が何度スイッチを押してもつかない。全身が震えるほど怖くなり、目をつぶってじーっとしていることにした。……30分は過ぎただろうか、恐々薄目を開けてあたりを見回す。誰かが向こうで手を振っている。髪が長い女性のような。だんだんと近づいてくる。髪を振り乱し、足を高く上げて歩く。まるで魔女ランダそのもののような。大きく裂けた口で「おーいおーいおーい」と叫んでいる。恐怖で腰が抜けそうになる。一目散で家に逃げ帰った。

翌日、田んぼの近くの村人にその話をすると、「川の向こうはブラ・ダラム（死者の寺院）があり、その川淵は火葬場になっている。遺灰を海や川に流したあと、残った灰を近くに捨てるのだが、それがちょうど、あんたがランダを見たあたりだよ。どうもそのあたりに何かがいる気配がする。たまに、その気配が呼びかけることがある。深夜12時過ぎに呼びかけられた時、3回の呼びかけには返事をしないように。4度目に誰が呼んだか確かめてから返事をするように」と言われた。なんでも、深夜12時過ぎに呼びかけられ、知らずに返事をして熱を出したり、気が変になった人がいるそうだ。妖怪ガマンの霊は、人の身体に入りたくて、いつも人の心の隙間を狙っている。のりうつられないように気をつけるようにと注意されたそうだ。

そしてその晩大学生は、言われた通りに全身に赤タマネギをぬりつけて寝ることにしたそうだ。

追伸：みなさん、この話は信じられないかもしれませんが実話です。実際に経験したカマちゃん、そしてババ・グステイさん、おもしろい話をありがとう。

“大地のうねり響く・竹筒楽器 ジェゴク”

和子 スウェントラ

写真提供：小原孝博

これから数回、この『極楽通信』を通じて後援者の皆様にジェゴクの文化・音楽を紹介出来ることに感謝致します。文章を書くことが苦手ですが、皆様によりいっそうジェゴクの奥深い音の世界を知っていただく事を願い、ここに筆を取りました。

ジェゴク音楽は、西部バリ島ジェンブラナ県ネガラ郡地域近辺から生まれました。特に、サンカルアゲン村の農民が中心になって演奏しています。

この竹筒楽器ジェゴクは、1928年頃に生まれた、と貴重な話を生証人の長老が語ってくれました。きっかけは村の連絡用。木筒、竹筒鐘から流れる音・リズムを聞き、心に打ち響く快感をうけ、好き者同志が集まり、自然体から生まれた木・竹筒でシンプルな楽器を作りました。木板で作ったジェゴクもありましたが、竹筒から作った鍵盤の音には対抗できませんでした。現在、ジェゴク楽器といえは竹筒です。

ジェゴク音楽の復活者、(財)スアール・アゲン芸術団のチームリーダーであるイクウトツ・スウェントラ

氏は、「竹は地球に人類が誕生する前に存在し、宇宙と地球のパワーを授かり生き伸び続けている。その竹が、われわれの暮らしの中で大切な役目を占めている。竹から、お寺の祭壇や家屋や生活の道具を作る。昔は竹から火を起こしたし、火葬の際のメルーや運搬に使われる道具はほとんど竹から出来ている。インドネシア独立の際には、竹の武器・槍でわれわれは勝利を手に入れた。われわれインドネシア人と竹は、切っても切れない関係なんだ。

真っすぐ天に伸びる竹は、神と人が通る道である。竹の節は人間の生きるうえでの節目を現し、節から節の見えない風がパワーになる。

楽器に使う竹を切る時期は、曜日、そして時間をバリ・カレンダーに従い、お供え物を捧げ、お祈りをしてからカットします。竹はカットしたが、竹の見えない命は生き続けている。

そして、いような音をうねり響かせ音を奏でているのだ。ジェゴクとして生き続けた竹は、やがてその役目を終え死を迎える。竹は演奏者の心によって生きる時間が変わってくる。竹が死んだら、燃やして土に還し、次期の生を待つのだ。」と語っています。竹と人間を結びつける深いつながりが存在するように思われます。

竹を収穫してから、約3ヶ月から6ヶ月の間、風通しの良い土地に、根元を上にして乾燥させます。それから、専属の調律師によって鍵盤作りに入ります。

音階はバリ・ヒンドゥー教の祈りが基礎となっています。一般にバリ音階は5音階ですが、ジェゴ



フレーム正面に彫られたポーマ



クの音階は、東西南北の神のパワーの4音階に、演奏者のパワーが一体となった5音階です。

竹鍵盤の台は、タギ (Tagi) の木で作られています (現在はチーク材も使われる)。足は水牛の足型を模しています。両側には竜 (地球のパワー・土台を現す)、鍵盤前のフレーム

は自然森林の神・ポーマ (Boma) を中心に、そのまわりは自然森林の植物がカラフルな色で描かれ、竹楽器の自然を強調しています。

バチはダップ・ダップ (Dab Dab) の木で作られています。この木は、神殿や社作りに使う丸太木 (直径10センチ位) で、あまり堅くなく、叩くと弾力のある音が出ます。そして、ゴム (タイヤ・生ゴム) も使います。ゴムのバチは木に比べて、打った時に弾力があり、攻撃を吸収するために響きをやわらげます。細かいリズムを軽やかに叩いて、次にまた叩くまでの響きをつなげ、重低音による深い音の流れを生むのです。

以上の準備が出来上がり、いよいよ農民演奏者の心と竹と温度、そして湿度が一体となり、うねり響き渡り、観衆の心につかり合う。空気、竹、演奏者、観衆が一体になれるのが、このジェゴク演奏のマジックです。

また今年も (財) スアール・アグン・ジェゴク団の日本公演があります。

- 佐渡公演／アースセレブレーション'97
：8月22・23・24日
：佐渡 小木町 城山公園
- 大阪ワークショップ
：8月26・27・28日
：茶化の里
- 大阪公演／河内長野世界民族音楽祭
：8月29日
：河内長野ライブラリーホール
- 横浜公演／音楽版地球の歩き方 Vol.2
：8月30日
：神奈川県立音楽堂
- 東京公演／インドネシア・日本友好祭 1997
：8月31日
：かつしか・シンフォニー・モーツアルト・ホール
：ゴン・チチチと共演

お時間をつくって応援に来てくださいますことを望みます。

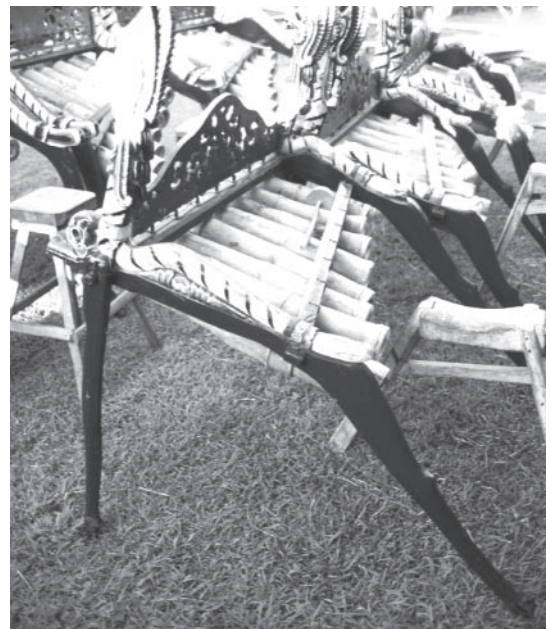
次回は、ジェゴクの歴史・文化などを、お話ししたいと思っています。

皆様のご活躍、ご健康を祈っています。

Terimakasih !

Sampai Jumpa Lagi ! !

(財) スアール・アグン芸術団・バリ島



●公演に関する日本での問い合わせ先
(株) カンパセーション
東京都千代田区神田小川町 1-16-3
Tel : 03-3233-1933
Fax : 03-3293-7367
担当者 : 小南 ひろこ

正しい出産と育児



by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 2

■第二弾 「妊婦はつらいよ」

●禁じられたエス

バリで妊婦になるということは、いろいろつらいものだ。いつも暑くて、むやみに眠くなるとか、身体がしんどくなるとか、そんな程度のもんじゃない。特にバリでは、口に入れるものが厳しく規制される。まず、絶対食べてはイケナイもの。まず、エス（氷）やアイスクリームの類。お腹の赤ちゃんが「寒い寒い」と言っ、必要以上に大きくなる（太る）のだと言う（ホントかよ〜!?!）。次に、パイナップルとタペ（いもやもち米などをラギーという発酵剤で発酵させたもの）。これは流産しやすくなる。食べるものをひかえた方がいいものは、ルジャッ（甘酸辛のヘンなソースをかけたフルーツ・サラダ）、パッソ、その他辛いもの。理由はわからないが、とにかく、お腹を壊して体調を崩さないようにということなのだろう。でも、妊娠してお腹がどんどん大きくなってくると、とにかく、汗が出る。常に暑く、常に冷たいものが飲みたくなる。実は私は掟（?）を破って、しょっちゅうエス・テ（アイス・ティ）だの冷たいジュースだのを外で飲んでた。禁じられるとよけいにしたくなってしまうのは人間の心情である。

お義母さんは、自分の経営する小さなワルンで、エス・グラ（ピンクに色つけされたシロップに氷を入れた飲み物）を出すために、毎朝、半ブロックの氷を買っている。その氷の大きな塊を、小さく割って氷入れの容器に入れる役目は私だった。それをいいことに、ついに大きな氷のひとつかけらを失敬して、お義母さんがちょっと台所から見えなくなった隙に、アイス・コーヒーとかオレンジ・ジュースとかを超早業で作って、一気飲みするのが日課になってしまった。……が、ある日、ちょうど一気飲みしているまさにその姿を、トイレから出て来たお義母さんに見られてしまったのである。その時のパッの悪さは、今考えても顔が

赤くなる。お義母さんは、見て見ぬ振りをしてくれたが、翌日になって「エスを飲むとね、……赤ちゃんが寒くなって可哀相なのよ」とポツリと私に言った。私はその時、一瞬考えた。友人が日本から送ってきた《妊娠のしくみ》がついている本を出してきて、図解を見せて、女性のお腹の中がどんなふうになっているか理解してもらい、胃と子宮とは離れているし、冷たいものがお腹の中でいつまでも冷たいわけじゃないし、何より赤ちゃんは子宮の中のあったか〜い羊水の中に浮かんでいるので、エスを飲んだところで、寒くて痛くも、かゆくもないのだということを説明しよう、と。

しかし、その考えは、私の頭の中ですぐに打ち消された。

昔から、冷たいものを飲み慣れていないバリの人々である。妊婦がそれでお腹を壊さないように、との気づかいから、そんな言い伝え（?）が生まれたのであろう。それに私が説明したところで、お義母さんの考えは変わらないに違いない。お義母さんとの人間関係をギクシャクさせてまで、家で冷たいものを飲む必要はないのだ。……が、しかし、日本人の友人とデンパサールへ買物に行った時のこと。友人がショッピングしている間に、CAMPINA のデカイコーン・アイスクリームを店先で買った私は、その場で堂々と食べればよいものを、無意識のうちに自分の車にそそくさと乗り込み、人目を避けるようにして、慌てて食べていたのである。自分でも知らない間に罪の意識が芽生えてしまったのだ。それにもしかして、もしかすると、まったく違う理由でBabyが巨大児になって難産になったりした時、お義母さんや夫のD（彼もお義母さんの言うことを信じている）に、「ほうれみろ、おまえがエスを飲むからだ」と言われるのも絶対くやしい。というわけで、バリ人の前では、決して氷やアイスクリームは口にしないようになった。（日本人の前では……？もちろん口にしていた私である）

●ここにもいた！！ ブラック・マジシャン？！

私と夫のDの結婚式の準備で、親族や近所の人々が
大勢家に入り出して騒然としていた頃のことである。

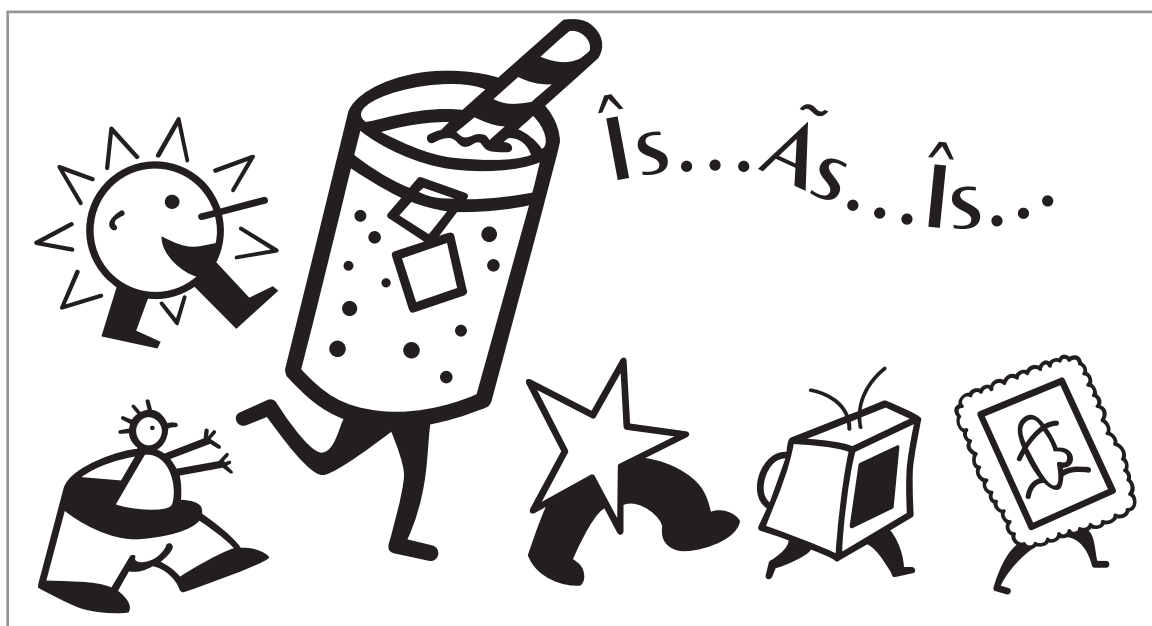
隣近所の、中でも特に口うるさそうな、そして手強
そうなおばちゃん三人組が、つたないインドネシア語
(彼女たちは基本的にバリ語しか話せない)で満面の笑
みを浮かべながら、私に話しかけてきて、雑談したこ
とがあった。その時、彼女たちは親しみを込めて(?)
私の手を握ったり、膨らみの目立つお腹に手を触れて
みたり、肩に手を廻したりと、スキン・シップをさか
んに行なったのだった。バリでは、同姓どうしのスキ
ン・シップは当たり前のことだと聞いていたし、実際、
親しいバリ人の女性と並んで歩く時は手をつなぐのは、
私としても普通のことだったので、特に気に止めもし
なかった。・・・ところがである。夕方になって近所
の手伝いさんたちが帰り、親族だけになるや否や、お
義母さんが血相を変えて私のところへかけよってきた。
そして、口から唾を飛ばさんばかりの勢いで「さあ、
早く！！ 早く台所にいらっしやい！！ 洗うのよ、
早く！！」と叫んで、私の手をひっぱって台所につれ
ていくのであった。何のことが、何が起きたのかさ
っぱりわからない。お義母さんは、ハトが豆鉄砲を食ら
ったような顔をしている私を、台所の軒下に立たせ、水
瓶から手桶で水を汲むと、それを勢いよく屋根に放り
上げた。そして、トタン屋根を伝って下に流れ落ちた
水で、私の腕や肩やお腹を洗うのだった。

「さっき、あのおばあちゃんたちとしゃべってたで
しょ。その時、腕やお腹を触られたでしょ。あの中の
二人はね、悪さをするので有名なおばあちゃんなのよ。」

「えっ？ 悪さ？」「そうよ、そういう力があるのよ、
これからも気をつけなきゃいけないわ。触られたとこ
ろは、こうやってイエ・チャチャパンで洗っとかない
と。ましてや、お腹を触られたなんて、Aduh～！」と、
私のTシャツをまくりあげて、すでにポタリポタリと
しか落ちてこない水を最後まで掌に取り、私のお腹を
丁寧に洗い流すのであった。台所の水をいったん屋根
に放り上げ落ちてきた水をイエ・チャチャパンといい、
葬式のあった家を訪問したあとなども、この水で清め
るらしい。

「日本では、妊娠中の女性のお腹を、たくさんの人
がなでなですればするほど、健康で立派な赤ちゃんが
生まれてくるんだよ。」と言って、私のお腹を撫で廻して
いった日本人男性がいたが、それを見ていたら、お義
母さんはびっくり仰天しただろう。バリでは、親族、
家族でさえ容易に妊婦のお腹を撫でたりしない。まし
てや、他人に触られた時は、マジックをかけられたと
思わねばならぬ。そして、イエ・チャチャパンで触ら
れたところを洗い清めなければならない。

余談だが、この仲良しおばあちゃんトリオは、この
あとの家の数々の儀式にもゴォパン(隣近所、もし
くは親類縁者で、それぞれの家のウパチャラの準備を
お互いに手伝い合うこと)に来て、隙を見ては私に近
寄りたがるのだった。そのうちの最強おばあさんCは、
なんと、近くでじっと見つめるだけで小さな子供が夜
激しく泣いたりする力を持っているらしい。このこと
は、のちのちまた書くことにしよう。とにかく、イエ
・チャチャパンで、ことなきを得た私とBabyなのであ
った。





●川のマンディは、すべての病の特効薬！？

自分の足もとが見えなくなる。下に落ちた物が簡単に拾えなくなる。パンツをはくにもひと苦勞。少し動くだけで動悸・息切れがする。足の爪が切れない。寝返りをうつのが難しくなる。お腹が大きくなると日常生活にも支障をきたすことが多くなる。Babyが重くなってくると、いよいよ膀胱が圧迫され、トイレが近くなるし、しゃがむのも、立ち上がるのもたいへんでいちいち汗をかく。

日本人のおばさんが、よく言うところの「よっころしょ」とか「どっこいしょ」は、ここではすべて「Aduh」（詳しく表記すると、普通のアドゥーではなく「アッ・ドー」のような発音になる）ですますことができる。何ををするにもしんどいので、何か動作をするたびに「アッ・ドー」と口をついて出る。すると、皆が「オー・ずいぶんしんどそうだね、あとでトゥカッド（川）に行って水につかりなさい」とアドバイスしてくれる。

ここでは、ちょっと身体がだるくなったり、お腹が痛くなったり、熱っぽかったりすると、すぐ川に行って長いこと水につかる。すると、すっきりさわやかになるらしい。暑いパリでは、身体が「暑く」または「熱く」なることはよくないこととされ、忌み嫌われる。どんな症状でも、すべて「身体の中が Panas（熱い）だから」と片付けてしまい、川に行って身体を冷やすのである。「そんな無茶苦茶な」と日本人なら思うだろう。私も思う。特に日本の妊婦はとにかく下半身を冷やさぬように、昼間から分厚い靴下など履いて保温に努めるのである。もし、いつも冷やしてばかりいると、流産や難産の原因になる、妊娠中毒症という病気にかかる。バ

リの女性たちは妊娠して、お腹が大きくなってくると、川へ行き、長いこと水につかって身体を冷やし、川底の細かな砂でおっぱいやお腹をマッサージするのである。私も夫のDと洗濯がてら、すぐ近くの川に行った時、試してみたが、プールの水と違い川の水は常に流れがあってすぐに身体から熱を奪っていく。昼間の暑い時間でも5分も水につかっていると、歯がカチカチ震えるほど寒くなってくる。それに、ただでさえ張って敏感になっているおっぱいを砂で擦るのも決していい気持ちにするものではない。一分も早くこの川から抜け出したい私の心情がまるでわからないDは、このうねなく気持ちよさそうな顔をして、川の真ん中にしゃがみこんでレゴンのメロディを口ずさんでいる。

川上では、小鳥たちが水面で戯れ、時々そよ風が頬を撫でる。上を見上げると、ナンカの木が生い茂った葉の間からキラキラと木漏れ日が差し込んで、川面に反射し輝いている。「マンディって、けっこう幸せになれるもんだわ」とDの方を振り返ると……。彼は身体の向きを川上に変え、宙を見つめて黙り込んでいる。なんと、ウ○チをしているのだった……。声を殺してクスクス笑ってしまう。すると突然、ずいぶん大きくなってきたBabyが、私のお腹の中で勢いよく動いた。川のマンディが気持ちよかったのか、それとも、冷たい川の水がお気に召さなかったのか……。きっと前者に違いない。

妊婦は辛いけど、けっこうのんきでHappyなものかもしれない。

バリ恋愛症候群について

- その1 -

長期滞在者 M 嬢

COLLUMN

「私はやはり N にとってみたら、ただの金ヅルの日本人観光客でしかなかったのでしょうか」

――穏やかならぬ手紙を受け取り、少し途方にくれて少しうんざりする。私には、彼女の満足のいく返事を書く事など出来ないだろう。又かーという思い、いかげんにしてよ、という思い、色々な思いが胸の中で入り混じる。

初めてバリに来る。もしくは2回目か3回目――。知り合うバリ人の男の子は、ホテルの従業員だったり、カフェの男の子だったり、旅行社のガイドだったり、運転手だったり…それは様々だ。思ったより流暢な日本語でエスコートしてくれる男の子達。最初はもちろん警戒している。が、ヒンドゥーの教えについての説明など聞いているとちょっと感動する。なんて純粋な人なんだろう、と思ったりする。チョット見はナンパだけけど本当は真面目で純粋な人なんだ、と思う。もしくは、その熱烈なアプローチを断り切れず…で恋に落ちる…。

恋愛のはじまり、というのは色々な理性が働かなくなる状態をさす。だから理屈なんて通用しないし、第三者がとやかく言える筋合いのものではない。分析する事はいくらでもできるけれど、当人にとっては目の前にいるその“一人”が“全て”なのだ。その事について云々する気は毛頭ない。そんな余計なお節介だ。

だけど、でも、それにしても、やっぱり思う事がある。あなたはそのバリ人の事、どれだけわかっていますか？ そうしてあなた自身、自分の立場がわかっていますか？

ツーリストというのは特殊な立場だ。ツーリストでいる間は、現実を忘れる事が出来る。朝早く起きて混んだ電車に乗って会社へ行き、馬鹿な上司の小言を聞いたり、使えない部下の世話をしたりする必要もない。お金だって使い放題だ、(もちろん限りがあるとは言え…)そして、バリというところは、確かに特別な力があるようだ。

日中の陽射しは、何もかもをぼんやり霞めさせ、めまいに似た陶酔感を呼び起こす。思考が溶け始める。力が抜ける。素直な自分を感じる。そして、何でも出来るような気になる…。

だけどそれは“錯覚”だ。ここでなら何でも出来るなんて、そんな筈はない。今の自分以上にはどうやってなれない。“神々の棲む楽園”に生活するのは、私達と同じく欲望を抱えた人間達なのだ。

相手のバリ人に奥さんがいたとか、日本人の彼女が沢山いるとか、それ位ならまだ良い方で、最近では犯罪としか言えない様な事件まで起きている。

冒頭の手紙の彼女は、バリ人男性 N からアプローチされていた。心を残したまま日本へ帰り、しばらくして、その旅行中に知り合って行動を共にしていた別の日本人女性にも、N がアプローチしていた事を知ったらしい。N が彼女を本当にどう思っていたか、私は N ではないから彼女に答える事は出来ない。それに、そういう事があったからと言って、たちまちに自分は金ヅルの日本人観光客にしかすぎなかったか、と考えるのもちょっと短絡的すぎるような気もする。けれどとにかく、彼女にはショックだったのだろう。

バリは本当はこわいところだ、と私は思う。何もかもエネルギーが強すぎる。フィルターを通さず直のエネルギーが容赦なく降り注ぐ地。バリ人には当たり前でも、私には、- 薄められたエネルギー- しか享受できない東京という場所で長い事生活していた私の様な人間には、このエネルギーは強すぎる。そしてこわい事に、バリでは、良いエネルギーも増大するかわりに、悪いエネルギーも倍になるのだ。

誰に対しても優しく受け入れてくれる様に思わせるこの島だけど、ここは本当は“楽園”なんかじゃない。私はここに生活する様になって、日々、目に見えないものに試されている気がする。かと言ってそれはけして“嫌”な感覚ではないのだが、でもだから逆にとてもこわい、と思う。良い事も悪い事も、東京にいたらとりつくりつられる様な事がここでは、ふとした拍子に表に出てくる、という場面に直面する事がある。そしてそれは全て、今まで単に自覚していなかっただけで、紛れもなく、自分の中に“ある”ものなのだ。

あなたが知り合うバリ人は、多分今のあなたを映しているー。

私のこの返事を、彼女は理解するだろうか…。

トゥアック (TUAK)



写真1

トゥアックというバリの地酒をご存じですか？

普通われわれツーリストが飲むことができるバリ島の地酒は、お米から作られるブラムとココナツの樹液から作られるアラックではないでしょうか。ブラムは発酵させたお酒、アラックは蒸留酒なので、ある程度の日持ちがします。しかし、トゥアックはココナツやジャコー (Jako) 椰子の樹液がそのままお酒なので日持ちがしません。そのためにあまり見かけるがありません。UBUD のパサールで売られているようですが、早朝でなくなってしまう、これもツーリストには手に入れることが難しいようです。

UBUD の北、テガララン郡のスバリ村に夕刻出掛けると、仕事をおえた村人がマンディも済ませ、ワルンで一服をしながら雑談をしている風景に出会います。その村人たちは手に手に、白い液の入った小さなコップを持っています。そうです、この中身がトゥアックなのです。夕涼みの二、三杯のトゥアックがこの村の男たちの楽しみのひとつ。村人たちのこんな日常なお酒がトゥアックなのです。男たちが数人集まり興にのると、ゲンジェと呼ばれる歌が唄われます。それはケチャとバリの民謡を足して2で割ったようなリズムカルなアドリブの唄で、時には踊りだす者もいるといえます。「私もトゥアックが飲みたいな！」と言うと、どこからからともなく、採りたてのトゥアックが運ばれてきました。それはそれは甘くて美味しいお酒でした。ほかの村でもこんな光景がきっとあると思います。チャレンジしたい方は、まめにバリ人に尋ねてみてください。

今回はジャコー椰子 (写真1) から採るトゥアックを取材しました。ジャコーはバリ語で、日本語名はしゅるです。

ジャコー椰子は、ココナツの木より幹が一周り大きく (50センチ位) すらりと伸びた一番上の部分に葉や花がつかます。真ん中から放射状に分かれた枝のうち、花がつくのは二本。枝の先っぽに、まるでレゲエのラスト・ヘアーのように花が鈴なりにになります。(写真2)。その直径10センチほどの枝を、花の根元でストンと切り落とせば、その切り口からトゥアックの樹液が出てくるのです。花が咲く枝二本のうち、トゥアックのために切り落すのは一本だけ。はじめに幹の一番上についていた花は、だんだん低い位置に枝がつくようになり、最後は根元近くになっておわります。根元近くの梯子に登らなくても採れる位置までくると、もう採るのをやめるそうです。どうも、梯子に登らないで採ることが嫌なようで、これもバリ人気質のひとつなのかと思ってしまう。

それでは、樹液・トゥアックを採る様子を説明しましょう。

- まず、花のつく枝が熟す時期を待ちます。(このタイミングは花が咲く寸前のようなのです)
- そして、熟した枝を木槌で叩いたり、しならせたり、塩をつけマッサージをしたりして枝をほぐし、樹液が流れやすくします。
- 次に、花に近い部分の枝を切り落とします。切り口からはじめは水分がでてきますが、それは捨てます。そのあとに、乳液のようなものがしたたり落ちてきます。それが、トゥアックと呼ばれ、お酒として飲まれるものです。
- 切り口の先に竹筒をぶらさげてトゥアックを貯めます(写真3)。一番はじめに採ったトゥアックは甘くておいしい、しかし、非常に強いそうです。
- 一日に2・3回、竹筒からトゥアックを取出すことができます。
- 切り口が固くなりトゥアックが出なくなると、その切り口を薄く切り取ります。すると再びトゥアックが出はじめます。
- 三ヶ月ほど繰り返すうち枝の切り口が幹に近づき、切り取ることが不可能になるほど短くなります。そうすると、この枝からトゥアックを採るのはおわりです。
- こうして、一年ほど何ヶ所かの花を切り落とすと、もう花は根元近くになってきます。そして、花が咲かなくなってしまい、このジャゴ椰子のトゥアックを採る寿命がおわったというわけです。

■ジャゴ椰子はココナツの木と同じように多目的に使われる重宝な木です。切り倒されたあとも、多くの役目が待っています。そんなお話を次の機会に報告しますのでのお楽しみに。

写真2・3のアングルは下から撮っていて、わかりにくいと思いますが、これは、高所恐怖症の筆者が写真1のジャゴ椰子に、竹一本に細い棒のステップがついた梯子に決死の覚悟で昇って撮ったものです。梯子からは葉の枝に足を掛け昇るのですが、枝の部分は鋭角になっていて足が挟まって非常に痛い。下では村人が「ティダ・アパ・アパ」とわけのわからない応援をしてくれている。途中でゾウリを脱いだり、写真を撮るため身体を乗り出したりと必死でした。というわけで、写真のわかりにくいのお許しくださいという言い訳でした。

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK



写真2



写真3

愛しのバンヤン樹

Cinta Pohon BINGIN

2

小野寺あつこ

🦋 Pasarへ行こう!! 🦋

Denpasar だけが市場じゃないよ。いろんな町の Pasarへ行ってみよう。

【 Gianyae 】

ここはイカットの町だという。観光客は大きくて立派なイカットのお店にバスで乗りつけ、帰ってしまう。オイオイ、ここの Pasarへおいでよ。

大きな町の Pasarだけど、観光客がいないのでのんびり見て歩ける。値段交渉も、初めから安いのでとまどってしまう。1階の衣料品、2階のお祭り用品も楽しい。

【 Sukawati 】

Pasar Seni工芸品の市場がある。ここの工芸品は、日本で見る、または Baliのあちこちで見えるおみやげ

と一味ちがう。日本のエスニック屋さんも勉強してね。ガムランのミニチュア、レゴンの冠、ココナッツの殻の加工品も一ひねり。

けれども、ここで買物するのは体力勝負。ジャワからの観光客が大型バスで乗りつける。すごい人で、すごいパワー。私はサルン1枚で退散。

【 Seririt 】

えんえんと屋根をつけて、広げていったような Pasar。そうだなー、夏の浜辺の海の家といった感じ。

通路をどんどん進んで行くと、次は何が来る？とワクワクしてしまう。

スンバヤンのための花やおみやげの果物を買う。私たちだったら、マンゴ・パイヤ・サラック・マンゴスチンが嬉しいけど、ここではミカンやぶどうが嬉しいらしい。なるほど。



Pura Tegesのバンヤン樹

アートフェスティバル

— Semarpegulingan を聞きに Denpasar へ —

アートセンターへ出かける。たくさんの Warung^{屋台}が出てる中を思わずパタパタ走り出してしまふ。

“そんなに急いじゃだめ。ゆっくり、上品に、堂々と歩きなさい” いつも言われてしまふ。日本へ帰って、交差点でパタパタと走ると、彼らの言葉を思い

出して走るのをやめ、クスクス笑ってしまう。

アートセンターの会場に入ると、憧れの ^{アビアン・カパス} Abian Kapas だ!!

Denpasar のグループの演奏って、リズムが POP。今風でかっこいいんだけど、身動きできなくなるって感じではないなあ。日本人もたくさん来てて、セッセと録音してたけど、Gamelan の音って、平たい CD やテープの内には収まらない。



Abian Kapas
アートセンターで

マリオ Mario に一目ぼれ

本の中の写真を見て、一目で恋に落ちる。

I Ketut Maria — Tabanan 生まれの天才舞踏家。アートセンターの中にマリオの写真が展示してあるのを“世界不思議発見”で発見。絶対見たいと探し回ったけれど“今は展示してません”と冷たい返事。かなしい…。1カットでいい、彼の踊っている姿がみたい!



REISBIBLIOTHEEK Bali より

恋にウロウロ

“Ayu 1 と Ayu 2、どっちが ^{かわいい} Cantik?” 突然聞かれる。

んー。誰がどう見たって Ayu 1 に決まってる。きれいとか、かわいいとか、かっこいいとかは顔や姿だけの事じゃないんだ。立ち振る舞いや性格、その人の全てをひっくるめて言うんだ。

私たちの今の生活の中で、きれい、かわいい、かっこいいなんて日常茶飯事。簡単に出てくる言葉だ。

Bali でも普通に使ってた。でも、妙にリアクションが大きすぎる。おっかしいなあ、とは思ってたんだけど…。

本人に直接、それを言うって“あんたが気に入ってる → 好き → 恋してる” ってことみたい。

青くなるー。

かっこいい → 好き → 恋 → キス → セックス

その感覚。ストレート過ぎて、すごい。でも、その通りです!!

🦋 Tengananの法 🦋

(国ではないので「慣習」と言われる)

- 木を切ってはいけない
- 木になっている果物を採ってはいけない
- レンガを焼いてはいけない

(大量の木を燃やすことになるから)

Tengananのこの法を作った人はすごい人だ。

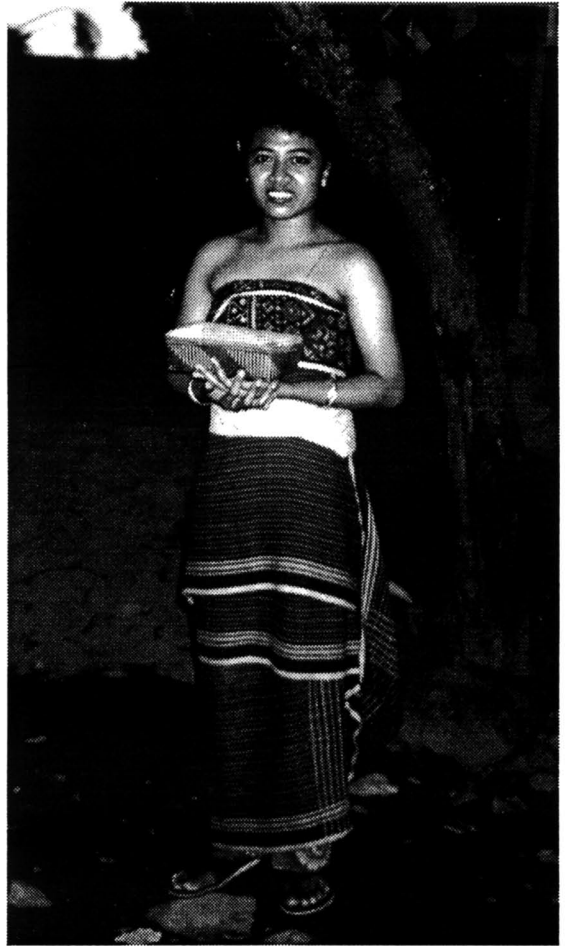
こんなに豊かな森の中に住んでいて、こんな発想ができるものだろうか。世界中にこの法が生きていたらいいのに…。

🦋 カンベン・グリーンシン Kamben Gringsingの力 🦋

儀式の時に若者たちが身に付けるこの布は、魔除けの力がある。

子供が生まれた親は、何年もかけて糸を紡ぎ、赤と黒と黄の模様を染め上げ、織る。その気も遠くなる行程にパワーが入り込まない訳がないと思う。

けれど、実際に病気になった時、その樹皮や草で染めたグリーンシンは薬になるのだそうだ。布をつまみ水にひたし、絞った水を少量飲むと病気は直ると、おばさんが教えてくれた。



Kamben Gringsing を巻いた女性

🦋 スロンディン Selondingで宇宙をただよう 🦋



◆ Selonding / Baliの先住民族(バリ・アガ)の鉄製のガムラン。楽器または、音自体が神であると信じられている。

青年2人の儀式が終わると未婚の女性のルジャンが延々と続けられる

お祭りがあると聞いて正装してやってきた。入口にいた兄ちゃんに“Balineseっぽい”と言われてニガ笑い。

そうか、ここの正装は違うんだ。カンベン・グリーンシンを胸から巻いて肩を出す。肩を出した人しかバレ・バンジャールへ入れないそうだ。

じいちゃんに聞いてみると“祭りはないよ”と言われた。ブラブラ歩きだすと、家々の路地を水牛がまるで犬や猫のように散歩している。

ドッと雨が降り出した。雨宿りして、おばちゃん

と話していると“今夜^{スロンディン}Selondingが聞けるよ”と教えてくれた。

外はもう真っ暗。ゴザの上で、じいちゃんとおじさんと小さな子どもが音合わせを始めてる。本当に音出るの？ってくらい素朴な鉄板。

ところが、始まったとたん、私はポーンと宇宙へ放り投げられてしまった。体をまるめて宇宙をただよっている。湿ってて、妙にリラックスしてて気持ちいい。

ああー、この感じはお母さんのお腹の中だ!!

Tenganan II — 祭りのあと —

“ひなびた感じがいいよ”と伊藤さんに聞き、でかける。

祭りが終わったあとの村は、まだその余韻を残してにぎやか。Puraのわきで、みんながギャンブルを楽しんでいる。その前には闘鶏のカゴがズラリと並び、じっちゃんたちが世間話。道の真中には、でっかいブランコ(祭りに使う。ブランコというより観覧車)が2台まだ残っていて、子どもたちが遊んで

いる。ひときわ高い建物の中にGamelanが並んでる。子どもたちがたたいで遊んでいるので、あれも、これもと音のリクエスト。

日本で言ったら、送り火かなあ、各家々の前に火をたいた跡が残っている。

暑い暑い昼下がり、村をひと回りして一休み。山の中のこの村を風が吹き抜けていくと、いっせいに木の葉が舞っていく。美しいなあー。



Tenganan II の村

前略

お元気ですか？

僕はバリ島にいます。

彷徨っているうちに、ここまで来てしまいました。

そして、なんとなくいるうちに、踊りを習うようになりました。

なにげなく立ち寄った家で、「踊りを教えてやろう」と言われたので、それなら一週間ほどやってみようかと思い、始めたのですが、やっているうちに、その先生と接しているうちに、踊りにも彼にも魅了されるようになりました。



彼はここで舞台にも立っています。

踊りを習うようになってから、しばらくして初めて彼の舞台を観た時の衝撃をどう言えばいいのでしょうか。心が震えた、いやそれだけではありません。何かに遮られて飛び立つ事の出来なくなった。そう、恐慌した鳥のように、僕はいたたまれなくなりました。許されざるような出口は無く、その門をくぐるしかなかったのです。

僕のバリ島での日々は、舞踊に音楽に毎日接することができ、そして、踊りを習えるという嬉しくて楽しいものでした。そして、なんとという幸運な事なのか、僕にも舞台に立つ機会が与えられました。もちろん、うまく踊れるわけがないので、とにかく一生懸命やるということしか僕にはできません。でも、僕にとってその舞台に立てたことは幸せでした。ひとりで踊ったのではなく、多くの多くの人達のおかげで、踊れたと思います。ガムラン奏者の人達や観てくれた人達、そして先生のおかげで舞台に立たせてもらえたのです。ひとりで踊るのにひとりで踊っているような気がしませんでした。

僕はバリが好きです。

そして、バリの人々が好きで、バリを好きな人達が好きです。

けれど、僕にはただただ多くの人々に感謝するしかできません。

そんなふうに、僕は旅してます。

お元気で、またお便りします。

草々

於 Bali・Ubud

三木 一正

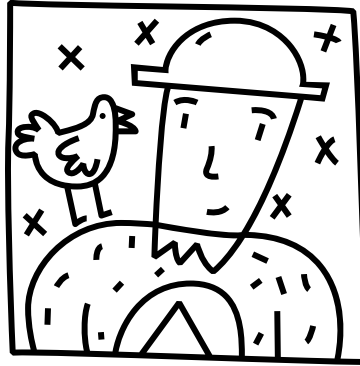
DARI JEPANG

札幌市：窪田節子

バリから帰って1ヶ月が過ぎました。ガイドブックを頼りにUBUDをぶらぶら、楽しい旅ができました。バリで出会った人々とガイドブックに感謝しています。

UBUDに滞在中、ちょっと気になることがあったのでお便りします。UBUDで見かけた日本人向けのミニコミ新聞(UBUDで結婚している日本人女性で作っているようです)に、「メディアに振り回されず、自分の目でいろんな事を確かめてゆくことの大切さを・・・うんぬん」と書かれていました。そして、お薦めレストランのコーナーで、カフェ・ロータスを紹介し、どこか別のインフォメーションで、このレストランの接客態度が悪いと書かれていたことを取り上げて、「カフェ・ロータスのこと(接客)を悪く書いた人・・・中略・・・それはとりたてて騒ぐことでしょうか?」とも書かれていました。私たちツアーも決して馬鹿ではありません。今時ガイドブックをうのみにして旅行している人はいないと思います。私も友達数人とロータスの咲き誇る池を觀賞しながら、カフェ・ロータスで食事をしました。でもやっぱりウエイトレスの接客態度はひどいものでした。この記事を書いた人はきっと、UBUDに長く滞在していてインドネシア語が堪能だったり、店員と顔見知りだったので、気持ちのいい接客を受けたのではないのでしょうか。私のまわりで聞く限りではあまり評判はよくありません。それも事実です。もうひとつ気になったことで「ウブドでも5本の指に入るのでは」と、この店のトイレをインフォメーションしていることです。UBUD中の店に入ってトイレをチェックしたのでしょうか。そして、そのランク付けの根拠は一体何なのでしょう。それは著者が感じたことで、人それぞれ、十人十色いろいろ感じ方が違うと思うのです。だから、接客が悪いと書かれたところでやはりとりたてて騒ぐことでもないのです。

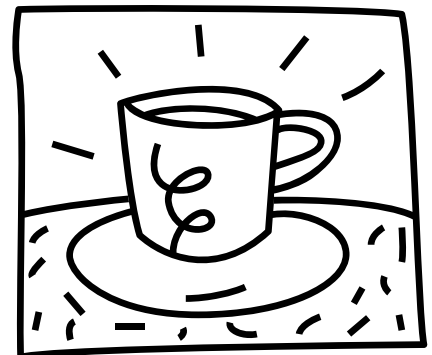
「あの店は、〇〇が美味しい」と、インフォメーションされたばかりに、お客がそれしか注文しない」とぼやいていたレストラン店主がいたと聞きました。それは他に誉めるものがなかったからではないのでしょうか。ほかにお薦めできるものがあれ



ばきっとそのようにインフォメーションされたと思います。これもガイド・ブックの恩恵にあずかっていることも確かなのを棚に上げて批判をしている。それはちょっとおかしいのではないのでしょうか。ここで一言断っておきます。私は決してガイド・ブックの回し者ではありませんが、言ってることと、やってることに矛盾を感じることに腹が立つ性分で、こんな“怒りの便り”になってしまいました。

居酒屋“影武者”はガイド・ブックに、「ウブッに移り住んだ日本人夫妻が作った店。奥さんが作ったウブッのイラストマップ…。日本人の情報交換場」などなど、すべて事実と反することを書かれながらも一言も抗議しないそうです。太っ腹なのか、それともその間違った情報を逆に利用してしまっているのでしょうか。経営者に伺っていないので事実はわかりません。

とにかく、情報は必要なものです。ある時は情報を受信し、そしてある時は情報を発信する側になる。情報は変動することもあり、その変動する情報を、キャッチし理解し利用するのは本人の自由意志です。それが旅のおもしろさでもあります。みなさん、情報に振り回されず、上手に利用して楽しいUBUD滞在をしましょう。



Toko ◇ BEST 店

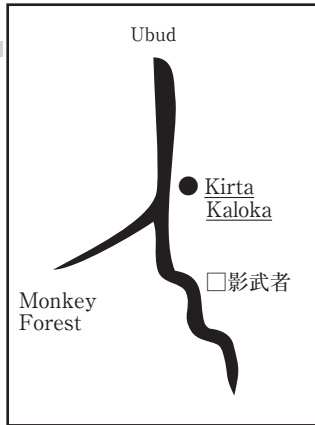
Kirta Kaloka

ヌサドゥアのハイヤットにショップを出している KIRTA KALOKA がウブドにもお店をつくりました。茶系のトラディショナルなコットンパティックの他に、いかにも繊細で上品なシルクパティックの数々は、ジャワからの“輸入モノ”だそう。これらのシルクパティックを使ったスカーフもあって、これなどは初夏、初秋の日本でワードロープにとりいれればたちまちポイントのあがるお洒落なアイテムとして活躍する事うけあい。

しかし、何といてもこの店ですてきなのは、バンドン出身のオーナーがデザインしているという布の数々。パティックの手法をとりいれながら、できあがりは一見無国籍風のモダンな仕上がり。どこか都会的なんだけど、ぬくもりを感じさせるのは“パティック”の持つ特質なのででしょうか。この布を使ったテーブルセンター、コースター、ランチョンマット等、どれも布地、縫製共にしっかりしているので、使いこんで何度も洗ったら又違う風合いがでてくるだろうと思わせます。

場所はパダンテガルのはずれ、スーパーマーケット“デウィマス”の道をはさんだ向かい側。マリアリバーの横です。

Jl.Hanuman Padang Tegal Kelod. Ubud. Bali Phone:62-361-77123



Warung ◇ 味な店

Kafe Padi

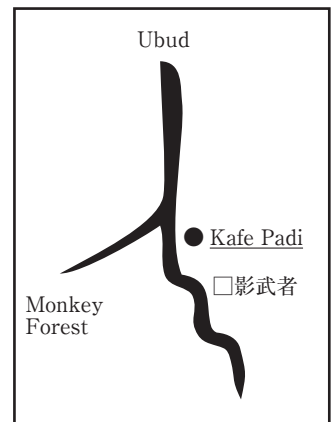
メニューに並ぶのは、他店とは一味違う、この店自慢の料理の数々。

バリ風手造りソーセージ、ベトナム風春巻、サモサ、タイ風サラダ等、ちょっと気の効いたメニューをつまみにいただき、ここのアラックが又とってもおいしいのです。前もって頼んでおけば、普通レストランでは絶対に味わえないアラックの前段階のお酒トゥアックも用意してくれます。韓国のマッコリのような、日本の生酒のような奥深い味、アラックよりアルコールは弱いのですいすい飲めるから飲みすぎに注意。

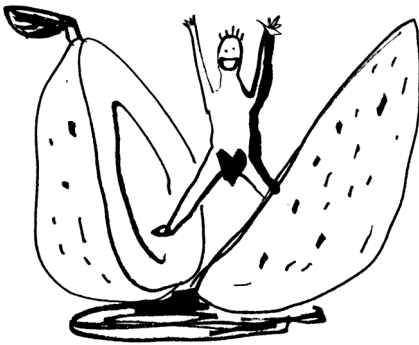
それからもうひとつのこの店のこだわり！ここのワインはオーストラリア・ワインではありません。なんとカリフォルニア・ワインです！！酸味おさえめでさっぱりしているけどフルーティ。これもいける！で、お酒のあとに嬉しいメニューもちゃんと用意されています。チキンとなすのカレー煮込み、マドラスチキンが意外にあっさり、お腹は満足。野菜がたっぷりとはいったタンメンは、そんじょそこの店のミークワとは違ってなんと生の細麺使用。どこまでもこだわる店。

場所は Jl. ハヌマンからブンゴセカンにはいってすぐ。ストリート・ウオッチングのできる一階のテーブル席の他に、二階はくつろげるお座敷となっています。

Jl.Hanuman,UBUD, 営業時間 / AM10:30 ~ PM10:30



お店紹介 + Toko² Sayang



Illust:Chicuru

A君が見つけてきてくれたコスは、S・T・S・Iの舞踊科に通う彼の同期の女の子たちの住むところだった。

「あんまり、やかましくないところを捜したつもりなんだけど」とA君が言った通り、下見に来てみると、そこは学生コスのわりには、ちょっと静かな感じがした。

鉄でつくられた大きくて頑丈な門に守られ、敷地内には、コスに住む子のバイクがゆうゆう駐車できるぐらいのスペースがある。ちょっと日本のアパートを思わせるコンクリートづくり2階屋の建物には、上、下に4畳半ほどの部屋が3つずつあり、そのうち上、下とも真ん中の部屋を除いた4部屋は、もう住人がいるようだった。カマール・マンディは、上、下にそれぞれ1つずつあり、共同で使うようになっている。台所も、といっても、コンボール・ガスがひとつ置いてあるだけの場所が、同じように上、下にひとつずつある。「悪くないな……」という印象を受けた。わりと清潔そうだし。

会ってみた大家さんも、なかなか人の良さそうな人だった。20代後半のまだ独身の彼は、名前をカデツといい、日曜を除き昼間は外に働きに出かけ、夕方は6時頃に帰ってくるという生活を送っているらしい。彼の家族は近くの家に住んでいて、彼ひとりがコスの管理をしているのだそう。ひとつつつこい笑顔の大家さんと話しをしているうちに、だんだん、このコスに住んでみようかという気持ちになってきた。

「今、住んでいる子は5人だけだから、そんなに賑やかじゃないし、女の子たちはS・T・S・Iに通っている子ばかりだから、きっと踊りの勉強にもなると思うよ。男の子もいるけど、悪い奴はいないから大丈夫」

とってくれた。

気になっていた肝心の値段のほうを聞いてみると、電気代込みでひと月たったの3万8千ルピアだったので、その場ですぐに6ヶ月の契約を済ませてしまった。

……それから、約2週間後。

私は、このコスの1階にあいていた真ん中の部屋に引っ越して来た。本当は、2階がいいなと思ったんだけど、1階に女の子が住み、2階には男の子ばかりが住んでいたの、仕方なくわたしも1階にしたのだった。自分で決めたこととはいえ、バリ人の若者たちと、特に同じ世代の女の子とあまり接することが今までなかったわたしにとって、やっぱりバリ人の学生たちが住むコスに日本人ひとりで飛び込むのは勇気があることだ。

「本当に、私、ここでやっていけるのだろうか？」

ひとり、部屋の中で荷物の整理をしていると、学校の授業が終わって両隣に住む女の子たちがバイクに乗って帰って来た。彼女たちに会うのは今日が初めて。「ナマ・サヤ・ユキ」と緊張しながら自己紹介すると、彼女たちもひとりずつ自己紹介を始めた。

シンガラジャ出身のKは、肩までのくせ毛が特長の、目がくりくりした美人さん。彼女は私の右隣の部屋にひとりで住んでいる。Nは、クタの子で、肌がとても白く、ちょっと中国系の血が混じっているのかしら？という印象。でも、可愛い。Iは見るからに踊り子という感じのする女の子で、ロング・ヘアーにちょっとたれ目の大きな目が可愛い。背がちっちゃくて、チョンドンとかが似合いそうだなあ、と彼女を見て思った。メングイから来ているらしい。NとIは、私の左隣の部屋にふたりで一緒に住んでいるそう。とりあえず自己紹介を終えて、お互いにテキトーな愛想笑いをして、彼女たちは昼寝をしに部屋に戻っていった。「ふー」とため息をつく。

あたりまえだけど、慣れるまで当分、時間がかかりそう。何を話しているのかもわからない。

「あー、わたし、ちゃんとここでやっていけるのだろうか？」

その他のニュース

■ UBUD で交通事故多発、要注意！！



ハヌマン通りで写真のような交通事故がありました。人とバイクや車、バイクや車どうしの接触事故やバイクの横転事故は一日に一度はUBUDで必ず見かけます。しかしハヌマン通りは、ご存じのように狭い道。あんな道で車が横転し、バイクの前輪がグシャグシャになるほどの事故とは、よほどのスピードを出していたとしか考えられません。想像しただけで身の毛がよだつ思いです。道が舗装され車が走りやすくなった分、スピードを出す車が増えます。ここでは、スピード制限や優先順位の交通法規はあっていないようなもの。交通ルールは自己中心といったところ。これでは自分自身で身を守るしか方法はないようです。くれぐれも気をつけてください。

■道路標識が新しくなりました！

バリはよく道路が封鎖されます。儀式が優先という嬉しいきまりがあり、待っているほうも儀式ならしかたがないとあきらめられます。ブンゴセカンのオダランの時には、写真のように有り合わせのものに書いて設置してありました。「UPACARA」と書

いてあるのは「儀式」という意味です。そして、他によく見かけるものに、「HATI² ADA PIODALAN」とか「HATI² ADA PROYETK」と書いてあるものがあります。HATI²は「気をつけて」、ADAは「ある」、PIODALANまたはODALANは寺院の祭礼、PROYEKは作業現場という意味です。先日クタで見かけたものは、立派な道路標識となっていました。この標識は、儀式の時だけ出張してくるわけで、常設ではないのが嬉しいです。

最近、道路標識が増えてきました。増えた分だけ、交通事故が減ればよいのですが。道路標識は車社会による環境への弊害です。歩行者にはなんの関係もありません。ただ景観を悪くするだけのものでもありません。日本の道路標識は、多いところでは10メートル間隔にあったり、一ヶ所に幾つもある、どれを見ればよいのかキョロキョロ迷っているうちに事故になってしまうというケースもあります。できることなら、UBUDは道路標識の少ない村になってほしいものです。そして、事故の少ない村でもあってほしいものですね。



■ どうして閉鎖してしまったの？

パダンテガルのハヌマン通りを南下し、ブンゴセカン村に向かう途中、居酒屋「影武者」を通り過ぎたあたりに、Warung Makan「PURI SELERA」というレストランがあったのを覚えていますか。一年ほど前にOPENした、6軒ほどのワルン(屋台)が入ったレストランというより食堂です。各ワルンで注文をして、真ん中にあるテーブルで食事をするという、スーパー・マーケット、ティアラ・デワタのワルン街のような楽しいのりです。お値打ち価格が人気で、

よく利用した人も多いと思います。「極通」取材班もUBUDのセゴールなきあとのナイト・スポットになれば期待し、お店紹介で紹介するつもりで写真も撮ってあったのですが、いつのまにか閉鎖されてしまいました。当初はプリ・サレン前にあるバビ・グリーン屋やプリアタンのトップサヨにあるザ・ヌードルといった人気の店も出店し、ほかにもタイ・チキン・カレーの店やジャワ料理の店がテナントとして入っていて、たいへん気に入っていたのですが残念です。誰かまた、そんな楽しい食堂をつくってくれないかなあ。



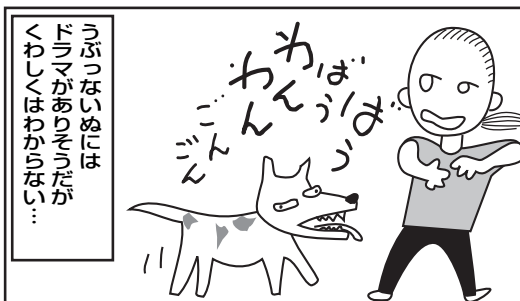
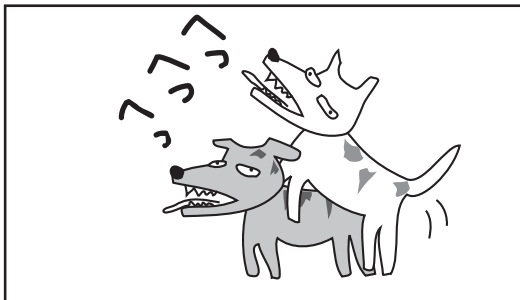
■ OKA 結婚！！

すでにご存じの方も大勢いらっしゃると思いますが、UBUDからMASへ向かう途中、TEGESの三叉路を南下して2キロほど行ったところに、THE CAFEというレストランがあります。おいしい日本料理や広々とした美しい庭園が印象的な、このTHE CAFEのオーナー、Ida Bagus Oka Geni Jaya氏がこのたび目出度くご結婚されました。お相手はなんとイギリス国籍のAmandaさん。おふたりの結婚披露パーティーは、去る4月29日、テガララン村にあるカンブン・カフェで催されました。バリ・ヒンドウの正式な結婚式（ウパチャラ）は、すでに4月24日に済ませていて、パーティー当日のおふたりは、始終幸せそうな笑顔を見せていました。パーティーは、バリで有名なメンズ・ブランドMr.BALIのオーナーのユニークな司会によってすすめられ、訪れたたくさんの友人達で盛り上がっていました。



Selamat Menempuh Hidup Baru!! お幸せに。

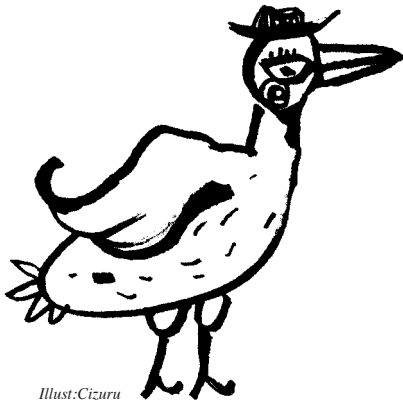
うぶっないぬその20 ほりり



うぶっないぬには
ドラマがありそうだが
くわしくはわからない…

【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おろかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。



Illust:Cizuru

バリニーズ アートを
基礎から学ぼう ☆
絵画・彫刻・トペン制作
e t c. バリニーズアート
のすべてを巨匠ブディアナ
氏に学ぶスタジオ、近日
UBUDにオープン!!

**STUDIO
B**

JI.HANOMAN
TEL.975691

バリ島
はみだしにゆんす!

■ 4月29日：インドネシア総選挙！

随分前から、三つの政党のデモンストレーションがさかんに行なわれていたので、今年になってバリを訪れた人はご存じかも。あちこちに緑や黄や赤の旗が立って、「何だろう?」と思った人も多いでしょう。それぞれ、星のマークのペー・ペー・ペー (P・P・P=Partai Persatuan Pembangunan)、プリンギンの木のマークのゴルカル (Golkar=Golongan Karya)、そして、水牛のマークのペー・デー・イー (P・D・I=Partai Demokrasi Indonesia) のシンボル・フラッグなのです。

とにかく今回(4年ぶり)の選挙はたいへんだったようです。当初、前スカルノ大統領の娘メガワティを党首に立たせたP・D・Iは、多くの国民の支持を得たかのように見えたが、現政府の横槍で(こんなコト書いたら怒られるかも)メガワティは辞退させられ、結局、現政党であるゴルカルの圧勝で(毎度のことですが)幕は閉じました。

選挙前は、ジャカルタを中心に、政府官庁の建物やスーパーマーケットなどがテロによって爆破され、100名以上の市民の犠牲者を出すなど物騒でした。選挙当日も、東ジャワのある町では投票を終えた投票箱が何者かによって燃やされたりして大荒れ。運よくバリ島では、選挙に関してはなんの事件も起きず、4月29日は無事に終わりました。

……とはいえ、ホテルやレストランの従業員は、投票のために田舎に帰らなければならず、当日は休業した店もあったとか。詳しい選挙の様子は、投票に参加したエナちゃんが次回の「極通」で報告してくれるそうですので、お楽しみに!

アムゴンばん

Pengumuman

■私、桂小枝のファンですが…。

ABロード (ウエスト) 6月号に「バリ島でパチリ 南光&小枝さんとウキウキの記念撮影」という投稿記事を発見しました。これは、影武者で偶然南光&小枝さんに会ったユキさんという人が、写真と共に投稿した記事のようです。小枝氏は、その後ラジオでこの時の旅行の話を紹介していた。「昨年の12月下旬、南光と二人で5日程バリに行っていた。」…と言っていた。小枝氏は以前にも仕事でバリに行っており、「テリマカシ、サルマカシ…」とギャグを飛ばしていた記憶もある。関西の忙しい芸人が5日間程の日程でウブドまで足を延ばし、有名な「影武者」まで来てくれるというのは嬉しいことですね。もう既に「影武者」はメジャーです。

1997-5-15 “関西の男より”



アムゴンばん



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / 堀 祐一 / 中田 恵

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：藤原まゆみ

極楽通信「UBUD」Vol. 20

1997年6月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1997 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101